

## テーマ1・医療と福祉、わたしの体験 「『できない』を『やめない』」

静岡県・静岡学園高等学校2年

代永夢空

「それって『チック』なんじやない？」

友達に言われて初めて知ったその名前を、少しかわいらしいと思った。しかし、今ならわかる。そう思えたのは、何も知らなかつたからなのだと。中学一年生の冬、私にチックの症状が現れた。授業中に突然けいれんのような動きが止まらなくなり、視線が私に集まつた、心配した友達が症状を調べてくれて、私は「チック」に出会うこととなつた。

しゃつくりをするかのような腹筋の萎縮から始まり、手や足、首にまで動きは広がつていつた。最初は時々止まらなくなる程度だつたので、特に気には留めていなかつた。しかし、だんだんとその時間は伸びていき、私の心を蝕んでいつた。何かに取り憑かれたかのように動き続ける身体は、もう自分のものじやないみたいだつた。

何気ない学校生活が崩れていくのはあつといつ間だつた。勝手に動く手では字が上手く書けない。引っかき傷のような荒ぶつた筆跡は、自分で見ても何を書いているのか分からなかつた。よく先生が声をかけてくださつた。

「夢空さんは書かなくていいよ。」

温かい言葉のはずなのに、異様なほど冷たく感じた。できない自分が大嫌いだつた。また、ご飯を食べることも難しくなつた。箸を使つ、おわんを持つ、口に運ぶ。当たり前だつたこれらの動作が、いかに高度なものなのかを痛感した。食べようとしてもこぼしてしまつたため、自力で給食を食べることはできなかつた。何もできないから学校を休む、という決断はあまりにも酷だつた。できないことをやめる。そんな変化、望んでなどいない。

しかし、変化を嫌う私は対照的に、周りは沢山の変化を与えてくれ

た。字を書けない私を気にかけ、担任の先生が他の先生方にも掛け合つてくださり、自由に学校のパソコンを使えるようになつた。キーボードを使うことで、メモを取りながら授業を受けたり、テストを受けたりできるようになつた。また、母が毎日おにぎりを持たせてくれるようになつた。口に運ぶだけのおにぎりは自力で食べることができ、ご飯を理由に帰宅することはなくなつた。毎朝握つてくれる母のおにぎりは、栄養たっぷりな上に特別おいしかつた。「自分でやきの」という実感が活力になり、心が軽くなつていつた。

私は、治すといつことを逆再生のように思つていて。今まで通りになれるように、元に戻す。だからこそ、治る兆しの見えない生活に希望を失つていた。「できない」とことは、「やめる」しかないのだと。しかし、家族や先生方、友達に支えられて初めて気付いた。できなくなつたことは今まで通りでなくともできる。やり方さえ変えれば、いくらだつて道はある。

そして、これは支える側にも必要な考え方だろう。誰かを支えるということは、その人ができないことをやつてあげることではない。やり方を変え、環境を変えることでできるようになることだ。できていたことができなくなつていく現実は、目を逸らしたくなるほど重い。だからこそ、できない事柄から離れるのは、自信を失い、より一層傷を深める行為でもある。「できない」を元に戻して「できる」にすることが難しくても、「できる」やり方に変えて、少しでも自立に近づけることこそが、その誰かの生きる活力を生むのだ。

チックの症状が改善された今、私はリハビリ職を目指してこうして必死に字を書いている。周りの支えがなかつたら、できなくなつたことから離れていたら、ここまで来られなかつただろう。世の中には身体が不自由になつた方が沢山いる。リハビリはそのような方々の「できる」を増やすためにある。例え今まで通りでなくとも、できなくても、諦めない。やり方を変えて生まれる「できる」を増やす助けに、私はなりたい。